

台風の大被害で どうなる千葉産野菜

千葉県は、台風15号による大停電と19号による洪水で、農林水産業の被害額が500億円を超え、東日本大震災（346億円）を大きく上回った。東京市場にとって、千葉産の野菜生産は非常に重要な地位を持つ。産地としての千葉は、ダイコンやニンジン、キャベツなどの重量野菜が上位を占めることも

あるが、夏秋キャベツの群馬も、ハクサイやピーマンなど多品目生産の茨城も上回る、東京市場にとって最も入荷数量の多い県でもある。系統共販の割合が低い分、すき間を埋めてくれる産地としても知られる。その主要野菜産地の被害はどの程度なのだろうか。

ニンジン

冬春期には不可欠な年間主産地千葉、他産地の補完期待できず年明け減か

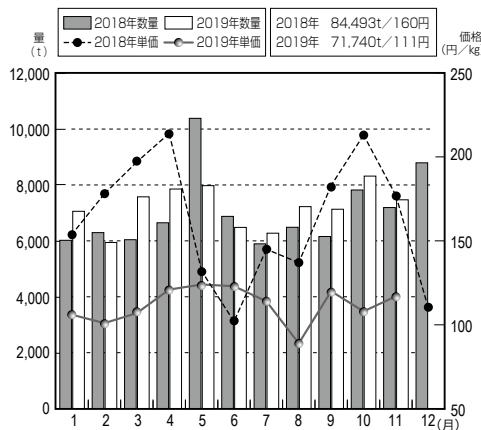
【概況】

東京市場におけるニンジンの入荷量は8・4万tほどの規模がある。そのうち、千葉産のシェアは近年、約40%と圧倒的なトップであり、とくに11月から翌年3月までの冬春ニンジンの時期には少なくとも50%、マックスで80%までを担う。春の徳島、夏の北海道の単価高に比べると、需要期である冬期に千葉産は単価的にも値ごろに収まっている。ただし18年は近年まれなほど単価高だったため、19年は安値推移だ。

【今後の対応】

千葉産ニンジンは県全体としては生産基盤があるが、JA系統が一元集荷・分荷販売する比率は低い。せいぜい農協単位の集約が、生産グループでの対応が中心で、農家個人が自分の判断で出荷市場を決めているケースさえある。その一方で、生産が分散しているため、リスクも分散してある意味、自然災害には強いはず。しかし、12月から年明けにかけて、北海道の残量は期待できず、輸入物も増えることになる。徳島産が出るまで数量は期待できない。

【背景】
19年の台風被害の後、11月の千葉産はどうなったか。数量は4割近く減り、シェアも18年の53%から33%に減少。代わって北海道が前年の2倍量を出荷してシェア1位に。ニンジン全体入荷量は補完作用もあって11月は3%増え、主産地の入荷減でも単価は177円と昨年並みに収まっている。千葉産は11月から翌年3月くらいまで安定供給する産地であるが、根菜類や土物野菜はやはり洪水には弱い。これから最大8割程度のシェアの千葉産はどうなるか。



カンショ

常に千葉産が50%のシェアを持続、貯蔵物で対応して他産地も相互補助

【概況】

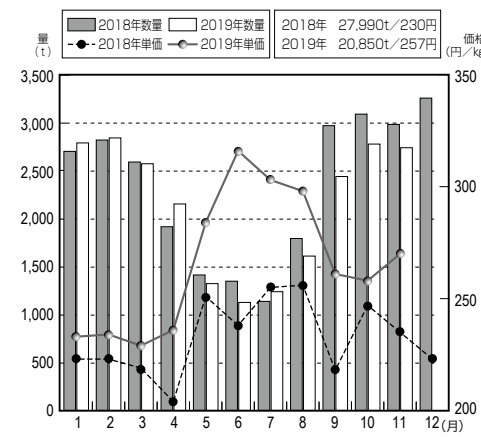
東京市場におけるカンショは、19年は春までの時期にはやや増、9月以降はやや入荷減で推移してきた。11月には8%減って15%高となったが、千葉産は10%程度減ったものの57%という高いシェアは保持している。関東でカンショ産地といえは茨城だが、加工用を含む生産総量は多いものの、市場への出荷量でいえば、千葉産が常に50%以上のシェアを持ち、茨城産はその6割程度である。それにしても収穫時期の台風被害の影響はどうか。

【背景】

カンショは収穫してすぐ販売できない。キュアリングして寝かせないと甘みが乗らない。千葉産など関東では、10〜11月が本来の収穫期であるが、その時期に出荷されているものは前年の貯蔵物の比率が高いのである。だから今後、年明けからの供給がどうなるかが問題だ。貯蔵が前提の品目であるから、千葉産が少ないとみれば、茨城産や春には徳島産の前倒し出荷で対応してくるだろう。焼き芋のシーズンだけに、流通業者は手当てを万全にしている。

【今後の対応】

千葉にしても、茨城にしてもカンショはキュアリングを含めて貯蔵施設を受け持つ産地市場や産地業者が存在するし、JAが施設を保有しての共販もある。近年ではとくに焼き芋に向く品種が増えており、千葉産は歴史のある「ペニアズマ」だけでは勝負できなくなっている。茨城では、焼き芋専用品種も誕生しているが、千葉には大分県の「べにはるか」を長期貯蔵し、糖度を上げたブランド「甘太くん」のような差別化商品への挑戦が欲しい。



今年の市場相場を読む

年間通じてシエア75%で相場作る、底堅い支持背景に生産基盤の強化も

カブ

【概況】

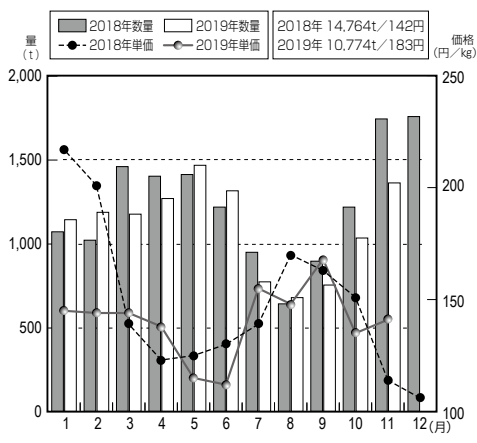
東京市場のカブは、千葉産が圧倒的な主産地で、シエアは常に75%前後、周年供給されている。夏場の最も少ない時期には青森産などが補充するが、それでも千葉産はシエア50%を切らない。カブのピークは年に2回。3月ごろからの春カブは柔らかく、11月ごろに出る秋カブはしっかりと歯ごたえが特徴。年明けには9割ものシエアで、常にカブ全体の相場を作る。19年11月に千葉産は2割強の減だが、これは前年が数量多く相場を下げたため。

【背景】

千葉産のカブは、柏など県北西部の特産で、歴史と生産ノウハウは他の追随を許さない。台風19号による圃場被害は、主に千葉市以東から房総半島の南端部にかけての圃場が水没、トンネルやハウスが倒壊した。カブは北西部が中心とはいえ、産地は県内に広がっており、大なり小なりの影響はありそうに思えるが、東京市場が建値市場であるから、被害が出て不足しても、従来は地場市場に出荷していた分が東京市場に回るだろう。年末から年始は強含みか。

【今後の対応】

カブは関東地域では一般家庭でもよく使われる。千葉産は、そんな需要に対して生産者が「責任をもって」供給しているかのように見えるが、実はその過不足が相場に敏感に反映するため、生産農家にとっては「商売として面白い」品目のようだ。糠漬けには必需品目であるし、春カブと秋カブはそれぞれ食味が違うため、その特徴と使い方を訴求して需要を増やし、もっと基盤強化してもらっても差し支えない品目である。千葉産の責任はやはり大きい。



ヤマトイモ

かつてから半減するも生産を堅持、需要は下げ止まって高級食材に特化

【概況】

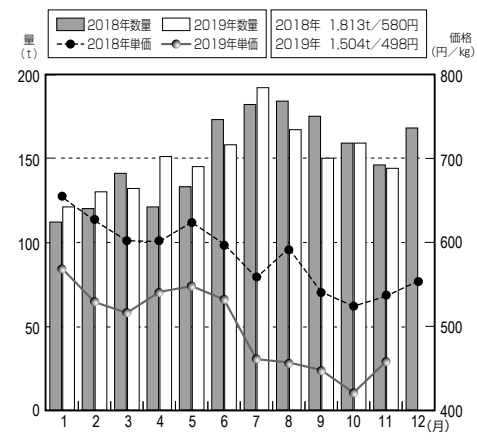
東京市場のヤマトイモは、すでに十数年前から比べると半分の数量に減っている。業務用中心の品目だが、過去20年の不況で長イモなどに切り替えられたり、品質のいい冷凍品(すり下ろしたもの)が出回ることで、需要そのものが減ってきたという要因もある。しかし、常に6割ぐらいのシエアを保ち、埼玉産とマーケットを担ってきた。この11月の入荷を見ても、主産地千葉が前年より10%も出荷を増やし、シエアは6割以上を占めている。

【背景】

ヤマトイモは、埼玉と並んで千葉は古くからの産地であり、市場の業務筋の評価は高い。東京市場ではとくに高級食材として、業務筋からの根強い支持がある。独特の食感や粘りは、同様の粘り気があるヤマノイモや丸イモとは代替しない。最近では、地域特産として自然薯が直売所で売られたり、ネットで販売されたりしているが、同様の品質を持つのが、生産している「ヤマトイモ」である。トロロ汁はヤマトイモを根気よくすり鉢で下ろしたものが高級品だ。

【今後の対応】

千葉産のヤマトイモは、これ以上の生産減は止まったとみる。今回の台風被害でも、掘り取りが済んでいたものが大部分で、今後の供給も問題はない。こうした業務用に特化した品目は、需要構造的に生産がつかないために減少しても、それが一旦下げ止まると、それ以降は伝統的に生産が続くものだ。かつての競合相手だった埼玉産が大幅に減少しているため、千葉産は促成品などの伝統産地としての矜持も含めて生産が継続されていくだろう。



流通ジャーナリスト
小林 彰一
 青果物など農産物流通専門のジャーナリスト。(株)農経企画情報センター代表取締役。「農経マーケティング・システムズ」を主宰、オピニオン情報紙「新感性」月刊「農林リサーチ」を発行。著書に「日本を襲う外国青果物」「レポート青果物の市場外流通」「野菜のおいしさランキング」などがあるほか、生産、流通関係紙誌での執筆多数。